



迪彝篇

全

9  
62





天保癸卯新刻

# 迪彝篇

時雍館藏版

明治五年十一月廿七日  
森鷗外郎  
氏寄贈

迪彝篇序  
寰宇之廣仁厚威靈莫尚於  
神州人類之衆大義鴻恩莫隆  
君父此愚夫愚婦之所易知  
矣侯多言抑至如逞狡謀詭計  
則夷蠻之邪氣或足以間  
神州之威靈亂賊之詐術亦或  
足以奪君父之恩義此愚夫愚



門 9  
62  
卷

迪彝篇

序

口 9  
62



歸之所易惑而臨利害得喪死  
生禍福之變則世所謂寸臣智  
士亦或持首鼠兩端不測之禍  
由以構焉豈可不深慮哉我友  
會澤伯民有憂於斯嘗著新論  
若干卷以述天下大計若斯篇  
蓋其緒餘耳然其所以推廣  
愚夫愚婦所易知欲銷禍變也

未萌者可謂深切著明矣恭惟  
神州以武建基若夫文物之盛  
則資於西土周孔之教者不尠  
今也西土既沒於胡元又陷於  
滿清所謂齊魯之訓尊攘之  
義徒爾付諸空言加之墜昆下  
零之類古人一小夷視者其傲  
然跋扈於坤輿之半宇內之變



亦大矣獨赫々神州

寶祚之隆萬世自若上下之分內  
外之辨嚴乎不可易以彼付諸  
去言去我安得不舉而施法矣  
事迪彛篇之作其可已乎哉  
天保壬寅五月水戸藤田魁書  
梅巷東湖書屋

迪彛篇目錄

總叙

三才一

國體二

神天三

君道四

師道五之一

師道五之二

師道五之三

總論正道之要

論君臣之義

論父子之親



師道五之四 論夫婦之別

師道五之五 論長幼之序

師道五之六 論朋友之信

師道五之七 論人道之正大

奮武六

通彛篇

總叙

神あり 日神の沖國あり 太陽は若り 誠  
 敬より 亦方れは 上古より 神聖の君民を  
 教へ 終へる 道も 自ら 正大光明 天日の  
 照臨 易く 易き 大道也 物あり 則ち 天  
 地乃 道あり 君臣 父子 夫婦 少く 夫婦の道  
 父子 あり 父子 夫婦 少く 夫婦の道



あり長幼小長幼此道あり朋友小朋友此之也  
 阿里皆民生日用の常道として賢愚となく  
 身は離れざる可なり書小昔はるるも及らん  
 して其道自明也大化の詔文は惟神我子應  
 治故寄と字とを舍人親王此後小惟神者隨神道  
 亦自有神道と云て祚の及れきりに自ら  
 神道を傳ふるその美物は一毫も曖昧を以  
 臆度と云く造化せざるは非して事につま  
 物よ法をて衆人といふことを知り得ざるは然の

大道也菅巫相の歌初にお集れ錦社の事小  
 といふと章代断ちてその美を承る時小志乃  
 自然のまふ叶へるあはれ一されは西戎南蠻の  
 その徳をを索り怪き成りく目も色も耳  
 も聞かぬ幽陰乃宣理此を以てみらんとする  
 其の白黒水炭は異あるが如くして滅小  
 下化自然は大地おまはるるを天地と建く懐ら  
 をも鬼神小質として疑たうと古 天祖  
 天孫皇極を建むひより今日に今に在るまで



聖子神孫

天日嗣を更修せ給ひて神と

成典に萬民に照臨すして彛教と迪

せりよまを人倫の大道好まて下りて民

あらん治りて此乃ち是るあやめ給へ

自然の節度よりて典礼を設て教へ導く

まて天れまのそとて四時行も百物生

するりぬしされし古の聖賢れ治よと能く

性来しは茲小彛教と迪くよりあらん少

王者れ地を國民に治ることあるべしとい

へまハ 神聖れ彛教を同さ給ひて治る

まのこよ性来して是と迪ひて人可くして

神聖れ盛徳を國人に治りて事成礼人

乃ち憂にやらんしるるぬく區く此焉止

き小非されは性来小代して紙筆を以て四

の民に治りて國恩に第一に報ひてんと聊

管見紙を不記して傳るあり

三才第一

天を象紙垂て日月星辰を運行し地ハ形を







陽より而して陰者此凝るとあり萬物の滅する  
不也其人氏暮氣乃暮るがごとく秋冬其枯落を  
於てこゝに風俗殘忍として陰險深刻の象  
あり故より東方に於てハ養生之主として生  
の倫理を本と爲しありれ教を寂滅をまゝと  
死後の禍福を説くありて天地乃自然たり  
人を天地乃男不生もてて天地と並立て三才と  
稱するを此なれハ天道と地勢と人情と合せ  
て大觀するを此を大道と小成の義あり自ら分

明也古陰神伊弉冉吾日々に千頭を教へて  
のよりハ陽神伊弉諾吾を日々に千五百  
頭を生へてこのよりをりもてて百姓をハ天蓋  
人と稱してより陰者之寂滅と趣き陽氣を  
生くとまゝとすることと主理を地乃初よりそ  
既小成あり御事ハ今 神明の國小生れ天  
蓋人の教小成りれ養生として此を東方  
養生乃仁を仰ぎ春風和樂此氣成りある生  
おれ倫理を明くす天臣父子夫婦長幼朋友の



道成者一勇猛の音と書く 皇化と恢弘

中 天日此照一昭々ん昭々る 神聖

乃昭光を仰る者一昭々んと志と云んこと

古く天竺の大なるまはるる天地鬼神の中心小

を叶ふべしあり

國體第二

天地乃同小萬國あり萬國は各其天ありくその

由成治む君あると其を各其天と仰るて天と

す國々みかま同と書ひて仰を辨一とす

同しき理り好まハ互に己り國を尊ひ他と夷

變戎狄とする事是亦定まる也されしは

國よは皆易姓革命と云ふことありくその由

乱る時ハ或は其天賦一或は是と故ら或

ハ寡婦孤兒成欺と云様と云ふ或ハ世嗣絶

る時を他姓の之れを以て其位を嗣一むる乃

邦として 俄に新等の事 其天賦種姓改る事

國々一々是亦此のありて其れを是とす故

不志むくかゝる事あるハ其天地と云ふこと



小天地一して主矣。臣とてくも小朝廷あり。國の中にも只神州のをもて此國開せよ。天日嗣無窮。小傳て一姓綿くこて。庶民の天を仰さざる所の。皇統のこを。治るは是其てとす。亦乃大なる事。宇内は比。なり。今古の萬民天地の召小雙ひる此貴き玉。よ生れながら吾國体を知らざるべんや國の。俸と云ふ人の身よ五俸あると知らざるが。を知らざるを己う身よ五俸あると知らざるが。

ぬし是よよわてむり。北島准后世の乱と欲き。神皇正統記を著して。皇統は正しく。を論と主略よ曰く大日本々。神國あり。天祖初く基成りて。日神永く統と傳。あよ系統のこ此事あり。是國よ々そのたくひ。なり。此も(小)神國といふ。是神代よハ豊原。乃千五百社の瑞穂此國と云て此國開の初め。より此れ名あり。又ハ大八洲の國といふ。まこ。麻土と云そハ大八洲中つ國の名あり。中州。











小のぬとのたきよ 天照太神の沛子正哉  
 吾徳と連日天恩植耳言とやましくして沛子と天  
 降彦く火獲く梓言とやましく 天照太神の沛子  
 先くこすしりて 芦原此中ぬのまことなりと  
 天くだらぬぬ終ふ三種の神寶と授けま  
 皇孫と勅して宣く  
 芦原此千五百秋の瑞穂の園を我子孫可王之  
 地也宜尔皇孫就而治焉行矣實祚之隆當与瓦  
 壤無窮者矣又 太神沛子小寶鏡と持まひ

皇孫と授く祝て吾兒視此寶鏡當猶視我可  
 与同殿共林以為齋鏡と宣く八坂獲乃曲玉天の  
 叢雲此劍を加へく三種と云ふ此鏡のこころ  
 分明なる誠とちて天下に照照しぬ八坂獲  
 乃神の曲玉と云ふ曲妙をまのつくと云ふ  
 と知しぬ神を授て不順と結と平けた  
 皇孫と勅しぬと云ふこの園乃神寶小  
 て 皇統一種正しくして後と云ふ減小まま  
 等の勅小くして押波寶鏡を石凝姥命乃



法くつるる八咫の神鏡ありて日神の  
 清形也八咫瓊曲玉八玉屋命作り給くも也  
 釵と素盞鳴る乃 太神ふきくは業  
 雲れ御方りと出の三種よ法をたる神勅ハま  
 きりて國をもちきんへまをち給くべし鏡  
 と善象を照るとは是非善悪乃す明く何らと  
 まはとつりてきくは柔和善順を地とん  
 鏡を剛利決断を地とす詞約ありて肯廣  
 一割へ神畧ふありて給く最也けけ

形も事也中少を鏡とふて宗廟乃  
 正體と仰まきの鏡を明をのちとせり中  
 中法一と沙龍をうりて給くハ深き沙心  
 をそめ給はんをりて天小ありての日月の  
 ありハ方一依て文字成制をた日月を明とす  
 ことり 我神大日れ靈にすもせハ明德  
 として照臨ありて君を照も神明の光臨あり  
 帝をたはしと勅をうけり神達の苗裔也  
 誰りちま成御さなるとき此理をさるる



其道に遠くす学問と云ふ極るへきよこそを  
 のむるやるへきよこそを文籍流布れ力なり  
 應神天皇の清代より儒書と廣めらる神聖  
 小まゝせハ天照太神の御心と受け  
 我國の道と認め深く一物もあらずかくて  
 これを獲く梓弓天降り中に猿田彦と  
 一神ありく筑紫日向高千穂の穂觸れ尊に  
 中御と一我を伊勢に中鈴乃河と云ふ  
 一と一は彼神の中れきくに穂觸れ尊

天降て遂に吾田に長狭の沙流よすもせ給ひ  
 たり清子 大く出見を生れぬ 大く出  
 見をれ御子 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊  
 ちり其清子 盤余彦をれ清世より人皇の代  
 と給まらむ 皇祖天照太神 天孫  
 詔せ 實祚の隆當与天壤無窮とあり天地も昔  
 小かき日月と光成改めと況や三種の神  
 器世に現を一物あり窮あるへきよこそを  
 我國と傳る實祚を仰とてきこむるへきハ



日嗣を更たすよ 皇にあんがしきし  
 及くくちあま北皇敏乃海せしれ一其天略也  
 海ふせれ乱ま成救ひ人のんを正くす人き格  
 言とつし一三種れ神器のあまらあまをへ  
 こく寶鏡ハ法神お激りて石凝姥乃神と  
 て 日神の涉形を鑄せしめしあま又曲玉ハ  
 日神を迎へまんとて天明玉れ神とて造  
 らしめし也神劔と喜盛鳴弓越乃八岐大蛇成  
 斬て埒るるなりその上にたす雲霧河原

一のハ奇記劔なるとして 天照太神小なり  
 上らる越ハ北方にて陰れ方也蛇ハ陰物れ稱也  
 北方に盤據して人民乃害成たせし陰類乃  
 巨魁を誅戮して其害を除去す武臣の顯き  
 と此に當りてゆるひ一神劔ありかくれし  
 三種とも皆偶然の事なり非を傳く 歴如  
 太御神の 神勅れまに教内ふまなり流ひ  
 崇神天皇の涉時小取りて 神威  
 を保りぬひ別不流敵を掃造して護身れ法



璽とあり神代乃物とハ大和の笠籠色と後  
 垂仁天皇此時より移して  
 伊勢の五十鈴の河と小浜坐よりしてより今  
 小浜よりして寶鏡を伊勢神宮よりして小浜神  
 劍を伊勢小浜海へと 日本武尊東征乃  
 中流中流て東夷を平け遂小尾張の熱田に  
 坐す 小浜也神璽ハ 至小浜身と離るを  
 始す 青永此乱小浜底に沈むるもとより  
 上く 宣居よ還 兼よせり 崇神

天皇様造一始ハ一獲身此赤璽のり寶鏡ハ  
 一徳長久乃火災小浜形損一たより神劍を青  
 永此乱に海に沈むてより此の劍を以て是を  
 換させたりと一此を神代より傳へたるハ  
 神物を歴然として世に現存する海と  
 天胤と古に意并く一尊窮よ傳へる事毫髪も  
 天照太神の誓をせ始ハ一赤時小浜のり  
 一 天地此間一萬國數多一と一なるもか  
 めて一此たり一何事異域少なるもて中より







て清くつゝ齋庭穂と授けりかゞれまやぐ嘉  
 穀を貴ひ給ふも 神州と瑞穂の國よ  
 一々萬民れ食て生へまを結も不敷あり我狄  
 多みの如くも獸蟲魚と食てす人き風土  
 小非まハ万民れ肌は潤まんりやを憂ひし一  
 仁と中もなるへまをり又 日神初て菊と食  
 せのひ一と蠶と桑よのまをりまをまの  
 時よりて布本孫るまをありて萬民れ寒  
 へを免ま一りまを給ふも也されハ今日小

たるまを 日神の神靈天小ま一りて養生  
 を養育一たるひ 天孫永く 天胤と傳へ  
 萬民よ君臨あまを給ふ 天孫と本よ  
 日神と同一氣よ海一ませハ千百世まもまを  
 忘させ給ふも踐祚大嘗祭とく 天皇即位  
 の時 清代くた一度れ大祭ありて新穀  
 を天神地祇小薦ひまも増腋荒腋とて幣  
 帛とも薦たも又年々新嘗れまのりまを新  
 穀を 太神宮及ひて下れ法神もを薦ひ



神夜神嘗此祭ありて別小神夜と新穀とを  
 太神宮小進め給ふこれより萬民此より小本  
 又報ゆんとの深きなるべしと祈年祭あ  
 りて時令其序小順んりてと下此法社より  
 臨ひ月次祭ありて幣帛法社より皆け國家  
 乃安穩なりん事成りぬよ大忌祭ハ水澤と  
 祈り風神祭、冷風と禊ひ鎮華祭を疫神  
 と法め鎮火祭を火患或防りしかく此ぬきの  
 類尚多し一之如本に報ひ福と祈り災或禊ひ

臨ふ事之如萬民を安りて人との深仁也  
 されハ万民此より小本に報りて福成りてこ  
 とを災と禊ふ事もみふ 朝廷より民と率  
 ひく致しをせりたれハ萬民を何より成りら  
 せしめても只心と考りて 朝廷を仰ぎ  
 尊らハ自り 神意より叶ひ天人此昌和合  
 て法神を守り給ふへとも也今日萬民の食ふ不  
 乃米穀を即ち 日神種させりひ 赤穀の  
 祭術せし也 亦これ腹を即ち 神代小始



一 経織乃業其廣り一なり其他の室屋器  
財百物ありて其民の日用とありて結う如

神代よりして 歴朝乃拮据經營小よりて

生ひるものよ非とありて今これ民 日神

より賜りて穀と食ひ 天祖 天孫天業

を弘め給ひて仁治によりて日用小事闕こ

と如く一と世よありて其大地小報ひを

らさるべあんやあまの古より其民新

穀と織り布帛と依り雜用此料を納めて祭

祀を助りて天神小報ひを

て玉珠れんより出るとて天孫其民れ為

小神と天と成典り其民乃誠心を天神よ

達し給ひてこれ万民と己り珠とて神小達

せんとして至尊に報せざる 玉を其民

乃心志成 玉體小負せらひて 天神小敬

事一給ひ聖恩れ大なる海より山

よりと高しと中ならんも松おろりて

一なり 天子は地とありて早飾の若



天地を象へりてさるる其理ある事也今平文  
 乃る少も其人不一事成然たるんよそ人を  
 さしきく己まゝ其身をいれんハ形を  
 人を茂如たつたたるなり況や況小 至尊に於  
 てなりてち己より天地を象る此理ありて  
 らす唯心成たつた一少一志を考へて  
 至尊に事へち己ハ自然小天ノ通を  
 つさあり戒狄此國よを庶人といへども其を拜  
 する類の風俗をあまこも是ハ如義ノ暗く

てその天を茂如たつた其君れ天地を象る事とを  
 さしおきて己より象んとは其本と一少と  
 り事成知るさるる事也本を二つあり  
 く民各々天を象る時を其心區まはく小なるく  
 ちらなるはたへハ大本成奉るに本やりな  
 といつ事とありかやの筋力分散せんして動うごく  
 めかくれちやく心區まはくまはるにありて其域の  
 天地鬼神小通するものありて其形人  
 父祖乃體を更けて此の氣成りけく生るる



之始ありきハ天地と父祖と人乃本也亦  
 至尊ハ天地と祖宗とを奉りて己ハ士民  
 外の大祭れ用と依りて己ハ玉誠  
 を天地に通し肉ハ父祖を奉りて自ら其  
 滅と奉りて是當然此道理にて 神聖  
 乃正しき訓也と知るべし  
鬼神の理を不知してして鬼神のまゝに叶ふべし天地鬼神乃  
 ことハ別し論著せし之始ありきハ亦ハに眼おれ人奉りて是  
 論也 天地と活物とハ陰陽と消長とにて萬  
 物と化生と變動周流と測るべし  
今日眼おれ人乃と奉りて  
 天地鬼神乃  
 天地鬼神乃  
 天地鬼神乃

天乃神道と云是天地の心性なり人を天地乃  
 氣成之と其ハ性也天地ハ心性と同れ  
 人の教也天此神乃本は易也聖人  
 以神道設教とて陰陽消長此を以て人乃  
 友と此是天地を論すも人事に基あり  
 へきたり也西荒ハ蠻夷ハ小智也天乃神乃  
 を知る事也人乃とて天地成測り日  
 月を圖書し流下天地の形體と論して陰陽  
 乃妙ハ性の活動と知る也聖人ハ人此肌膚毛髮



乃水と滯して性情ある事を知りさうりぬく  
 其況細密ありし人事に益なり天地と視く  
 死物として是成教の心を慢る也天威慢れ  
 之故を聖人の誅を免まると他の人も背く  
 形もい恨令いま眼あよ天誅を免るとも天  
 定りたらん中を切れた道に切あらん破滅  
 すくき如也

君道第四

天祖よりめて四海小照臨よりしてより

歴代乃 聖帝天小代りく萬民と震育

たまひ君道師道成りてあきを治め且  
 多くりく萬民の爲小災害と除く生を厚く  
 一用と利一官と設り紀綱と立く賞罰を  
 明小すくも天乃也若獲陷阱を設て猛獸執  
 鳥小害と除く川澤を通一溝洫と用く水旱  
 乃患成防き兵刑と以く暴乱を禁一城郭関  
 門と制して寇盜小備ふる類くも民害と除り  
 ちらあり不穀を殖田疇と治め經界と正く



糶糶を平少貯蓄成多く本業を貴の末作  
糶糶を平少貯蓄成多く本業を貴の末作  
 を賤んまの取みふ生紙厚くす此乃あり  
を賤んまの取みふ生紙厚くす此乃あり  
 室屋を管し衣服を制し谷財を生し有無を  
室屋を管し衣服を制し谷財を生し有無を  
 通らるれ取皆用成利ま此道也是等の政  
通らるれ取皆用成利ま此道也是等の政  
 令と統し治ん小百官のくしてハなるのさ  
令と統し治ん小百官のくしてハなるのさ  
 事ゆら取官を分ち職を設くま是成治む  
事ゆら取官を分ち職を設くま是成治む  
 紀綱とを綱の大綱あり即政治を引興さん  
紀綱とを綱の大綱あり即政治を引興さん  
 此れ大綱也綱乃目ありも大綱あり此れ  
此れ大綱也綱乃目ありも大綱あり此れ  
 有自廢弛して用をふさぐらぬく政のあり  
有自廢弛して用をふさぐらぬく政のあり

ても紀綱といふ事とゆくその大体を振擧せ  
ても紀綱といふ事とゆくその大体を振擧せ  
 さる時々細大此也混雜して第事廢壞に依  
さる時々細大此也混雜して第事廢壞に依  
 て紀綱をましく有自と引擧るなり貴罰ハ人  
て紀綱をましく有自と引擧るなり貴罰ハ人  
 其れ大柄也賢者を擧て高位小置能者成使  
其れ大柄也賢者を擧て高位小置能者成使  
 して其職を治りし不肖を黜け姦慝を詰り  
して其職を治りし不肖を黜け姦慝を詰り  
 佞人成遠さけ風俗を勵し天子此れも長し  
佞人成遠さけ風俗を勵し天子此れも長し  
 小人の道消さるに及ぶ事畫く貴罰の用小  
小人の道消さるに及ぶ事畫く貴罰の用小  
 あり是を考れしみか人君天下代りく第  
あり是を考れしみか人君天下代りく第  
 民と治るの乃おまハこれ成君道といふまなり







て兵革を止めしむる今我民眼安小  
 歴朝の仁澤小潤ひ 東照宮に功烈を仰ぎ  
 日神の種させむひ 米穀を食て千百世子孫  
 連綿したる深恩成一身小負ひ 二百餘年干戈  
 乃苦くを免ま父母妻子成養ふ千百世乃深  
 恩と二百餘年此佳澤とと百年少も満つる  
 身と心と強ひたらんより終身心力と免した  
 其美分れ一も到るへくは無成  
 我今日何れ成と以て生けしむる事とぞ知

らと如何して兵乱よあるが故と云ふやと  
 知らざる事だといふ魚此水中にありて水  
 小居るよりと志らざるよ同一人として生れし万物  
 乃靈たらんを此一身と魚此水にありて世  
 と終らんを恥しむる事に非らや

師道五之一 總論正道之要

人乃禽獸小異ある事其如何そや禽獸も其  
 欲する物と食く腹小充る事成る人  
 て飽やく食ひ腹よ充る人倫の道とぞ知て



其方と終んと云さるる禽獸の所為ありて  
 故ふ 神聖天小代りて君道と云く萬民を  
 治め衣食恒小闕るるありて且と師を  
 以て万民を導く人倫と云くありて  
 禽獸は冥然と云く或知るるありて或は  
 以て天地自然は大道也大なる道は  
 人乃性来す人なき下は何人のあるを  
 自然は一條の路を踏分け使て性来  
 けは自然は大道と云く人乃これと同

億兆乃人乃性来す人なき下は何人のあるを  
 然は一條の大道備る也人倫は君臣父子夫婦  
 長幼朋友は五品あるを天造の自然なり五品  
 ある時ハ親義別序信の五典備るは事  
 自然乃大なるあり 天祖三種の神話を授り  
 以て皇統一姓小なりて天子は恩厚く孝乃道  
 著れしり忠孝は及ぶるは夫婦長幼朋友の  
 みらとて隨て悖き事定まるるは理あり



歴朝の 聖帝既小この大道成以く萬民を  
 教へり中少也 應神天皇此法代り至  
 りて治道も既より備りて其の教化を崇め  
 りて是の時節小當れり此時幸に漢書  
 堯舜孔子此を傳りてハすかち此を  
 以て萬民を導きりて 神州と漢土とを  
 以て東小向ひて地勢少く如湯比平氣  
 を受け風土之宜りて人心も正りて其の  
 又典れ亦自ら人情も通ひて 天祖忠孝此

茲に符命を依りて人小取りて吾族を此に之  
 少く此道とせり此の是より其の教化  
 を備きり 天智天皇世と中興したるに  
 制度一新して治政又再び興まりて其の  
 月久しきとて天下大にみだれ異端邪說と  
 一くして其の比より遠西の  
 左道中國に浸淫せり 東照宮禍乱と平け  
 名節を勵まし士風を振ひ忠孝を以てて其  
 士民を磨礪して西の左道を禁断せり



大猷公此亦耐小至るすてに邪徒を  
 盡く平けらまきり海外に震慄させ  
 日本人小三眼ありと傳へり又踏踏して邪  
 徒の歸正せしむるを足とひく胡神の像を  
 踏めらるる蠻夷の入はるるもの已も中も是  
 を踏めらるる事成恐まて長崎と望んで  
 股慄したる清人の書少も入へりや  
 乃如く國威海外に震ひ我狄觀觀の念と純一  
 事外國小をその比を率去れ民たらん

天祖よりして 歴朝の 聖帝民と  
 守く會歎く事と免れぬ仁風を  
 仰き 東照宮より以来嚴神を設て民と  
 て被髪左衽を免まらぬ一切烈を念ひ  
 邦君若く其民を教諭せんとす時  
 古より師道ある小よりて萬民も夷狄禽獸乃  
 如くあまの人倫あり今日世ふまらぬ  
 事と自ら知りて君臣の義あり父子に親あ  
 り夫婦小別あり長幼小序あり朋友小信あ



らん事令く 天神の赤心よ叶くべしなり  
然ハ 王邦の事へもん事々令く人々を  
盡くたにありし初るへきなり

師道五之二 論君臣之義

君臣の道を義を主し人君は臣と使ひ臣の君  
小事つるより上下各々其義あり古き天然の  
大道よして人の造作する所なり人君は臣の  
間小義民あり万民相和樂して其群を樂と  
禽獸と異ありし自然れ人情なりされども

其中に百事と裁判する人成まは是非と  
ち曲直成辨し其治政を俾く事なりして  
一日と過りては又自然れ情あり百  
事成裁ありしと然る自ら君長の道備まる  
たりと申に小ありと村君邑長と大なり成  
天子より以下諸邦の君人その裁おを文  
そのハ自ら臣民は乃たりと申に君成依く  
民を治るものとし農工商を治る君士  
その日用小依給し其治政を受く力と勞する



之於人成者人治之也（イ）治之也（ニ）勞之也（三）若  
 人小養之也（イ）人治之也（ニ）士農工商切之通之（三）  
 事之易也（イ）互に相救濟也（ニ）是と曰民と云々曰民  
 乃亦小業成也（イ）のを遊民と云有れも益  
 於く無けきと損を以ての事れハ論也  
 小及之也（イ）かくれぬ君ありと民ありと天地  
 乃自然也（イ）君臣は義と云々の一日もなく  
 一と云すべし（イ）是前人の在る由り約し  
 不しと云天地自然の大なる況や（ニ） 神州に

天祖三神嘗成傳へるひ君臣は分定りて天地  
 開闢也（イ）一姓歴くして（ニ） 天日嗣也（三）  
 らせぬは今日も是るやと 天祖の遺體を  
 以て臣民は照臨す（イ）やせは更長は分て地と共  
 小易くは臣民乃祖先の姓也（ニ） 歴朝の仁治も  
 浴せしむ始あり今日也（三） 至尊ハす法も  
 天祖の正統も（イ） 天祖も同體小はもは  
 天地に在に始りたる大義ありハ天地ありん  
 きりも易くもありあはるべし是と君臣義あ



天子ハ王ト小代リて天業成ひらめ  
 幕府くわふと天朝てんてうと依よて下したと統御とうご  
 邦君やうきんハ一邦いちぱう天朝てんてうの藩屏はんぺいナリ  
 幕府くわふハ政令せいれいを其國そのくにニ小布せうふく是こゝニ臣民しんみんたる人  
 者各おのづか々其邦君そのやうきん乃命のみことニ依よて小布せうふく幕府くわふ  
 乃政令せいれい小治せうちの理ことわりあり天朝てんてうを仰あやぎ  
 天祖てんそニ報むかひ奉ほうるは乃也なりその理ことわり易簡いけんにして其  
 道明白だうめいナリ易簡明白いけんめいめいなるは大道だうだう也戎狄じゆうてきの俗  
 ハ眼前がんぜんニ大乃たうあり事こととハ知しるハ幽陰ゆういん暗昧あんまい乃

事こと成人せいじん乃知しるは乃也なり其その理ことわり易簡いけんにして其  
 一種いちしゆ此こゝニ尊そんぶるは乃也なり其その理ことわり易簡いけんにして其  
 乃奉ほうる其甚そのしんきは乃也なり其その理ことわり易簡いけんにして其  
 乃君也なり其眼そのまなこあり事ことあり所ところの君きみとハ漢  
 視しして一時いちじの假令かりに形かたちありて小布せうふる君きみあり  
 乃なり陋習ろうじゆハ乃也なり近世きんせい蘭學らんがく者流しやうりゆうハ乃也なり  
 乃なり本ほんと譯官やくわんより由よしく蠻夷ばんいの言語ごんごを翻  
 譯やくするは乃也なりハ國家こくがの害がいも然しかる事ことありし  
 中ちゆう小せうハ戎狄じゆうてきの邪說じやせつを道聽途說だうていどうせつする事ことありし



つてかゝる君はれ大義小節をたふさむこと  
伝へて人少も語り民心を迷ひ其實を國  
家此嚴禁を犯すにあらざれば自らあら  
惡むつてはるべきやされども其父と教  
事人情れ其父の邪徒を以てして外  
君父小忠孝を盡すべしと教れども其父と君  
父よりを尊ぶるのありといふものも腹小  
阿まひ孟子も其心小生じては事に害あり  
としおれぬ一日邪徒は濫行ありて上より

是と制せしむる時より起りて必君父小對して  
弓矢を執るに於て其心針崎島原等の逆  
亂を以て後鑒とすべき事に非ざるや其  
不倫の外は人道を犯るを知らずて人と生れ  
ん人倫を明し天倫と共しんば  
神明の福助を有へば眼前の主君とさし  
て鬼神小媚を以てして鬼神は是と悦び  
臨んや今幸よ神明は國小生れ萬世  
一種の天日嗣を仰ぎ奉らん天下は公民



ハ仮初しんも易い簡明白は大道と夫の詭譎きん險怪けん乃の  
曲塗まが傍徑はた小迷まよとさん事こととて天心てん小叶こ

ひく 神しん明めいを守まもり終はるるなり

師道五之三 論父子之親

父子ふし此こ道みちを親おやをまもるる人ひと生なれく父子ふし何なにともわ  
天地てんの自然じぜんありまハ孩提がいの童どうも親おやと愛あい親おやの  
心こころありて父母ふぼ此こ膝下かた小抱こきき孝ことて時ときとて  
て其親愛そのおんあい乃の心自然こころじぜんよし生なるる年長としとて人ひとは  
父母ふぼを敬うやむる心こころよし自然じぜん小生こ生なるる也なり孝こ乃の

道みちを愛あいと敬うやむるの二ふた小ゆりされるも父子ふし此こ道みち  
ハ恩おん成なり本もととるるものなりまハ親愛おんあい乃の心成なり以もて  
主しゅとするる事こと也なり是こゝ敬うやむるとて主しゅ父母ふぼよし事ことんるもの  
くくくつりく已やり心をそとたんん小こたたのつ  
かか孝これるも叶なする事こと也なりハまに海  
すするる也なり及およびて自みづからまの珠とりて明か  
るる一いっ孝こハ徳とくのなりて愛あいと敬うやむると天下てん下か  
達たつとれハ即すなはち是こゝを仁義にぎぎとん故ゆゑ小徳せうとく教おし四海しがいよ  
加くわふると天子てん此こ孝こと一國いっくわくと治ちるると法ほふ度たふ乃の孝こ



一法を守れと卿大夫の孝と君長に忠順  
 たる成士の孝とひまきし生るる時々その志と  
 善ひ身よりけりて後ハ其志成継く是孝子れ心  
 其身を終るもて其親を忘る小忌うなり也  
 中庸少と孝者善継人之志述人之事者也と云  
 て親よ事ん少々目あよその口體を善よの  
 非と父祖の業成継て其志を達ひると大孝  
 といふ孝經の首章少も詩と引く無念爾祖聿  
 脩其徳と有りて父祖小人をくハ口腹の養と

のも悦よへられとも志士仁人を身成教して仁  
 を成ひ有り仁小志とくハ一父れ養を顧  
 其父祖君子れ人をくハいよ口體を善ひ  
 けりとも仁と成さんとす其志と傷りて  
 孝と云かハ父祖の志とハ終が長くて口體と  
 此も養少と父祖を小人と思ふに迫るる  
 故よその志成継く其善を成物其の地業  
 を脩めん事こそ父祖の心と叶ひて永  
 孝とハ云へられ父子を本同一氣とて身體の



分まらざるはとなりたると一水は流るる如  
し上流濁ると下流も濁り下流塞  
る時上流も止る水脈連絡して流るる如  
なり人の身も水脈連絡して分れ  
子孫乃血脈を父祖の血脈なり父祖ハ上流  
し子孫の前身なり子孫を下流  
父祖乃後身なり故に聖賢は語少く身を父  
母の遺體なりとしつる天地同體初に人民  
はくより以來一氣流通して子孫の限りハ

相連絡ある故に父を親愛して疾痛痲痺も己  
身と同じく祖先と念ふ事父を慕ひ  
子孫を慈むるも己の身も異ならず  
永に孝慈たり此故に生る時を是と喜ひ死  
時を之と憂ひ其志を終て永世も忘る  
事故人道の盛衰也禽獸ハ母あり子成知  
るく父あり事成知らん庶と父あり事を  
知りて祖先を敬する事と知ると如その  
思念は久遠の事也近世養子といふ



盛小なるをより異姓の子を以て祖先乃後  
と人陽たる家名阿達とも血脈ハ陰小孩く  
他ノ穢の時と父子一氣なるを以て忘る家  
名とハまんとすまとも祖先乃神と名を以て  
まよ色形さふまの子孫れ身とて是と愛  
るのせよ身の勢をまよちて非と君子れ乃  
ハ久遠と忘るす人々各々其父祖を祭りと云  
る其遺體を以てお身を祭る方れハ本より  
一業れ相感するも理りたるを死するに於て其

神遠く天堂地獄へ往くこと少く非ざるの後  
身れ子孫に付て纏ひて近く室堂中成離る  
へん依て遺體を以て孝敬と爲す時を  
鬼神感格して其祭と奉る一氣れお祭る  
事祭ハ弓鏡を放ちて堅きものゝ當る時ハ  
弓ハ手こゝへあり鏡を坐後動さうぬしこれ  
ハ此父子分る一體乃祭を以て久遠不推と  
まよ々千百世とて一人に異れ一人祭と  
日嗣の君々 天祖を祭りて其姓を律備め



孫の諸侯小と氏宗河のりて各々其祖と祭る事  
 古れ道也漢去も王者ハその祀乃自りて出る  
 所々々々を祭り諸侯と其始祖より以下と祭る  
 大夫士各々降殺ありて祖禰を祭る其礼也  
 其徳いよく隆あると社ハ其孝を申るこし  
 よく遠さ小及よりの本よると其理り也古  
 天祖三種の神吾代傳へるひ一時小實鏡と授  
 けく吾兒視此實鏡當猶視吾と宣へり  
 天孫と天祖の遺體なり  
 天祖を祭る

めんとて實鏡よ向らせ孫の鏡中れ淨形と  
 即ち天祖乃遺體小す海せば天祖乃  
 窮り如く昌へめんよと天祖永く鏡中に  
 居りて吾も其を鏡をみるこしとて此  
 意を叶へるなりとてかくれぬく父祖と子孫と  
 同一氣とて天地と在る窮りありて自然  
 乃天倫なり我れと大道と知らされん父祖の  
 外より前身あり子孫れ亦小後身ありと思ひ父



子たるをとも肉身の假合なりといふ説ありて  
 其甚しきも一なりて我父とハ小なる父あり  
 といひ其尊奉する所の夷狄は神を大なる父  
 と稱する所の邪説を何りて蘭学若流なども  
 然る是は迷ふもの有りといひ父母は遺體を  
 同體の分枝の是と近く己の身小取く人々自  
 ら知りての道理なりは是とハさかきてきく  
 目少と見す耳も少りさかき天堂地獄乃宣論  
 と信し實事を捨てて虚言を信するは父

母此外小己の身と生ひるに別ありあつても  
 といふ自然の身を離れての邪辭は迷ひ眼を  
 乃我父とハ小ありて蔑視して他人の造るる  
 金人画像は倭にたるとも赫々たる神の  
 悦ひありて少と非されん神明は  
 訓は後ひ父子祖孫永世一氣なる事を知り此  
 心と推して己の身もさかき天祖  
 恩澤を蒙りて人々此子孫なるを我知り  
 今此 至尊也 天祖と同業ふまへ



すゝめを知りて 至尊成仰あがを尊らんとも  
 已り祀先此 天祖 天孫と仰き尊らんとも  
 昔に變うつる事形かたちらんハ是祀先の志成終つひく乃  
 大孝と云へし其の志を継ぐの孝人と終つひくて  
 君の事少くも孝終少と資たくわ於事父以事君と  
 以もつて教しよ意いしん叶あひく即ち孝者始於事親中  
 於事君終於立身たてまと云ふ義なりと遠き祖先乃  
 志こころを終つひく成なす方かたハ此を父母ノ孝事と  
 盡つひく教理ありんやされハ是を父子此親おんの

大形おほなまのものとしんへん方かたハ人誨おしこれ人倫乃  
 大乃を盡つひくハ 天神の沛心あまのこころ少といふて是  
 と悦よろこびぬハさしんや

師道五之四 論夫婦之別

夫婦の道之別べつを主まく次つぎハ男女河まハ夫婦  
 あつとされも男女此る小別といふ義を此時  
 ハ必かならず乱みだる事禽獸けいじゆハ異ちがなすハ故ゆゑなり尊そん卑ひ  
 肉にくかど多おほくして天地の志こころをす教しよを自然しぜん乃  
 天道てんたうふまハ夫婦此間このまにも別ありて敬かしこ成



失るべし夫の乃を推て凡男女此別を正しく  
内外の分ちと嚴よき事聖賢此書に詳か  
きハ今委く論じらるるも及らば是又天地乃  
初より自然小備りし乃如是ハ古陰陽二  
神よりさせし此陰神歌の詞を陽神より先  
ならく唱ゆべきを固く戒て陽神先の唱く  
るより天地の開初より陰陽此義と正し  
終るるは史叙別ある此乃の由て起る事あり  
我れ禽獸の如き國なれハ男女の別をかく

父子妻とさるにさる類の陋者譽く歎く  
一中心を少く機智は用け一國の事  
自然の天倫を事ハ羨も初るは主乃を思ふ  
士も盡く道不背く事多きなり父子  
兄弟妻を取て己り妻とする事ハ率  
乃説を没て種姓の失せん事と惡むあはれ  
しん本より種姓しんも辨へる陋説  
しん母を聖賢妻媵を蓄て健嗣と廣む  
乃をも知らざるなり父子兄弟妻乃別をか



一ハヤヤより禽獸の行ふをハ海と云ふ  
 一ハヤヤは鄂羅斯と云ふ國に其王死して子無  
 時其女を嗣とすその女は男子とハ他姓あり  
 一ハヤヤの生る女子と嫡嗣とす事遠西戎狄  
 乃俗あり女子汝母乃種と思ひ已り女色他種  
 一ハヤヤ其嗣とす女の世より種姓ハ易  
 一ハヤヤ又男女とも小父ハ種ありハ已り女乃世  
 一ハヤヤ種姓ハ易らされ其女子れ子ハ  
 他種なれば祖先乃種姓ハ非也是二ハ

一ハヤヤ種姓ハ易らされ其女子れ子ハ  
 一ハヤヤと女子汝母乃種と思ひ  
 一ハヤヤ戎狄の陋習とす一ハヤヤ是ハ陽施  
 一ハヤヤ天地乃自然ハヤヤ男女ともに一  
 一ハヤヤ變化ありと知るは地陰陽ハ理ハ遠  
 一ハヤヤ邪説ありと云ふ二色と禁とす一ハヤヤ西戎の  
 一ハヤヤ俗と云ふ國王と云ふ一ハヤヤ一夫一婦ハ陽  
 一ハヤヤ小妾勝と云ふ事と許と云ふ大道成知  
 一ハヤヤ之故と云ふ論する時ハ男女ともハ同



人物を以て一丈一婦少く之を配ひらけとて其乃を  
思ふべし之れを是又陰陽此理を暗く照らす也  
凡天地の道貴たか此との其教少く賤いやきとの  
ハ教多し天よ立てて太陽ハ只一輪いちりんなり  
夜の陰いんありて月ありて星ありて星ハ其教ありて  
多し又天ハ只一つありて地ハ万国ありて是  
即ち易えいよしく天一地二乃道理一君一  
して二民なり成君子此乃を也故に卦くわを  
畫えらるる少く陽交ハ一畫陰交ハ兩畫ありて天

地自然の道也陽ハ貴く陰ハ卑し之れハ男女  
乃ちも億兆いっせう此は民一君一事ありて少く一  
家少く一丈一婦少く妻ありて妻ありて女めたり  
一男一事ありて天地の道ありて妻と娶むする事ハ  
祖先此後を重かみして子孫と終はるんとの義  
なれハ天地の乃ちも聖賢此後ありて西戎ハ日此没ぼくして  
廣くさるる事聖賢此後ありて西戎ハ日此没ぼくして  
乃ちも向ひて陰氣の國ありてその風俗  
考ひて婦人女子と悦よろこむる事成好なりなり



乃みよ、邪説を唱ふも其理り也されども自  
然此大道に背きてを必其事に害ありとを  
禁するも、ついで継嗣を後ち主國大小乱る  
志也諸國は属これあり也今此太陽の生  
し給ふも小向へる貴紀國に生れたる人も  
露も降りると我秋の邪説も惑ひて天地の大道  
小背くへるは次史ぬれ居おのつる尊卑は  
別ありて天地の初より定まる大道ありは謹て  
伊弉諾尊此神教を守りてきたり

師道五之五 論長幼之序

長幼此道を序とまゝに人々ありは兄弟何  
長幼ありて其次序自ら備はるる自然の  
身と親乃枝と、兄弟は一本此兩枝乃以て  
一氣此分体ありは恩愛の意一也此こそ相  
助けお故に事左右の事は、  
孩提の童也其親を是る事成知の猶也  
す、小及ても兒と敬されりて知るる自然  
乃人情なれば兄と弟と愛り、弟と敬



て小枝の大枝より手はよりぬく存するに自然  
乃差等少しく即ち長幼の序あり此心を  
推て郷黨に達し長者を敬む故に其年  
一倍増るものより父に事し十歳を  
長したる少く兄乃ぬく事し又長し  
たるに道路を並ひ行少く少く引返して  
肩を以て長若し隨ふ事につきて其長幼  
乃序あるより是れ小准して知へ是れ郷黨小  
齒を貴しとすなり天下に達尊三つあり三

つとく爵と齒と徳と有り 朝廷小く爵は  
以て齒徳より尊しとす郷黨小く爵徳より齒  
とすひ世に輔け民小長くは爵齒より徳  
徳を尊しとすと達尊と云周礼制法小く一命  
せしむ下古より於時々他郷小くは爵を以  
て序されし郷里に在るは齒を以て座次を  
かひ再命せしめて中古より於時々郷里に  
爵を以て序されし父族とて宗族は爵を以  
父乃尊属ありは齒を以て座次より三命せしめ

通釋

四十三



てと士とを以て父族少を齒し、母族少を齒し、  
 是れも父と兄とに先たぐさる也。是れ爵と  
 齒と成、斟酌して設くる制度なり。是れ又天子と  
 以て世を輔け、民の長とたると又は徳行道  
 藝を尊んとして、天子と爵と齒と小拘ると  
 姓あるは成とすとすべし。也。出乃爵齒徳は三の  
 一時より所よりして各々其号ふ所あり其  
 宜と斟酌して一を挙げ二成廢する事なり。  
 一むるは聖人の深意なり。此長幼秩序と

事皆兄弟之道なり。推して終るなり。故小孝終  
 小也。兄より事あるに才たるとあまは其順ある  
 也。やと長小移すへいとより又兄弟より嫡庶  
 乃別あり。此義を推して親族は間小移し。古ハ  
 氏宗といふのあり。氏と族と各々其嫡家  
 小敬事と申せよ。是と氏長者といふ。武家の  
 世と形りては、親嫡家各々家督となりて、高  
 と徳願と澤と少と。大宗小宗と云事有り。その  
 始祖乃正統を大宗と、次大宗は庶子各々分族



あつものといふ宗といふ宗者其族人と率て  
 大字に事つるもの百世といふと庶子に嫡子  
 小事といふに祖先を宗ること必宗子乃家  
 一於くとも是よりより子孫に恩意厚く分  
 族多しといふも一本に分校の如く恩意流通  
 して皆其一氣に分作をりたりと知り宗族和  
 睦しく世に風俗も淳義ありし其本を適庶  
 乃分を序てたるより出るべき即ち若幼に  
 序を推廣しと字族をてよ及ばせ也かくの

如くに推廣しと一事より萬事に及ぶは古  
 ならず一端をらされも悉く詳小せんは事  
 繁りればこそ紙略をかりれば如く天地乃る小  
 人民あり兄弟あり其間も長幼ありと各々  
 其序ありしより自然に節文ありしと古乃道徳  
 學ひしと若幼に序を失はば家族を睦くす  
 るに即ち天神小事なるに一事也御  
 小戎狄の國より此義を知りしと兄弟も  
 乃後の人と同じく視て世に人をみふ友あり



此ハ兄弟才と世人と成かつを私なりといハ其  
 類の邪説を何りとせしめ見墨子無愛の説に  
 似く蠻夷此陋習固より天倫の叙ある事と知  
 らざるよりと申す其邪辭なりと知るべし

師道五之六 論朋友之信

朋友此乃々信を主として其民あるハ類聚群分  
 して其志同しきと然と友とす事自然乃  
 道を以て友とせ道同く志合ひくお交るものな  
 きハ自ら詐偽と云事をなす信を以て交る事

是又天然の備へたる道理也夷蠻戎狄を偏氣の  
 國を以て此乃理を知りて弱き肉ハ強きより  
 食を以て人の國を侵掠して互にその利を  
 争ふの類にして苟く利乃為小交をも何り愚  
 陋く會歎れ群居するよりみく今日親とて明  
 日忘る類もあり又世の人を皆友あると云く  
 君臣父子夫婦兄弟をも混合し一概小交と以て  
 目する其の惡風俗もありて蘭學は徒ら妄小  
 其言を信して少なり利のためは交るを偽り







秋々此道理は暗々々々善悪邪正は差あもるく  
 一際皆友なりと思へるは是西貌の事と以てお  
 交り也面貌同く其心同く其心同く其心同く  
 偽を以て交りハ用友小信なり我秋ハ吉よ  
 了禽獸均しき風俗あり本より其道の邪  
 正と論する少くも是れ朝陽に向く  
 善く國よ生る人倫正し教化沐浴して子  
 百世を歴する人々をわたりてあつても邪説  
 小迷ふへくは變夷れ夏と猶もと云事ハ聖

人乃大戒ふまハ變夷れ左道惚々々々愚婦の  
 迷も然らん事と懼まて聊りその大概を論  
 するなりと

師道五之七 論人道之正大

人倫小不品父子君臣夫婦兄弟朋友あまハ即ち又典乃教親  
 信別序阿々事自然此天叙尚書小又典ハ天叙  
中庸ハ君臣父子夫婦兄弟朋友天下此達道なりハ  
 片時を離るべきに非ざ我秋の隠れ  
 と索め怪をひひ生時の實行をかめく



死後幽陰乃空理を臆度<sup>おそ</sup>たる<sup>る</sup>のみく<sup>く</sup>あま<sup>ま</sup>成  
 離<sup>く</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>日用小妨<sup>さまた</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>は<sup>は</sup>氷炭<sup>ひやうたん</sup>は<sup>は</sup>是<sup>たのみ</sup>也  
 離<sup>く</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>天然<sup>てんぜん</sup>は<sup>は</sup>真<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>離<sup>く</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>造<sup>ぞう</sup>設<sup>せつ</sup>の<sup>の</sup>偽<sup>いつはり</sup>あり<sup>り</sup>異<sup>い</sup>端<sup>たん</sup>の<sup>の</sup>徒<sup>とも</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>可<sup>か</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>  
 を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>て<sup>て</sup>生<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>は<sup>は</sup>天然<sup>てんぜん</sup>の<sup>の</sup>道<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>き  
 得<sup>え</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>小<sup>こ</sup>非<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>是<sup>ぜ</sup>よ<sup>よ</sup>依<sup>よ</sup>て<sup>て</sup>口<sup>くち</sup>小<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>又<sup>また</sup>倫<sup>りん</sup>と<sup>と</sup>離<sup>く</sup>て<sup>て</sup>空  
 理<sup>り</sup>を<sup>を</sup>説<sup>せつ</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>其<sup>その</sup>身<sup>み</sup>ハ<sup>ハ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>五<sup>ご</sup>倫<sup>りん</sup>は<sup>は</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>在<sup>あ</sup>  
 て<sup>て</sup>片<sup>かた</sup>時<sup>とき</sup>を<sup>を</sup>離<sup>く</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>已<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>自<sup>おの</sup>ら<sup>ら</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
 る<sup>る</sup>身<sup>み</sup>ハ<sup>ハ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>倫<sup>りん</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>形<sup>けい</sup>骸<sup>がい</sup>を<sup>を</sup>去<sup>さ</sup>

本<sup>ほん</sup>より<sup>より</sup>或<sup>ある</sup>人<sup>ひと</sup>倫<sup>りん</sup>と<sup>と</sup>乱<sup>らん</sup>り<sup>り</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>已<sup>お</sup>り<sup>り</sup>奉<sup>ほう</sup>ず<sup>る</sup>本<sup>ほん</sup>の  
 胡<sup>こ</sup>鬼<sup>き</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>尊<sup>そん</sup>て<sup>て</sup>君<sup>きみ</sup>父<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>蔑<sup>めつ</sup>視<sup>し</sup>する<sup>る</sup>は<sup>は</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>  
 と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>其<sup>その</sup>實<sup>じつ</sup>は<sup>は</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>も<sup>も</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>異<sup>い</sup>偏<sup>へん</sup>を<sup>を</sup>離<sup>く</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>あり<sup>り</sup>  
 天子<sup>てんし</sup>あり<sup>り</sup>幕<sup>まく</sup>府<sup>ふ</sup>あり<sup>り</sup>  
 邦<sup>ほう</sup>君<sup>きみ</sup>あり<sup>り</sup>天下<sup>てんか</sup>國<sup>こく</sup>家<sup>け</sup>と<sup>と</sup>治<sup>ち</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>徳<sup>とく</sup>澤<sup>たく</sup>小<sup>こ</sup>  
 と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>冠<sup>かん</sup>乱<sup>らん</sup>を<sup>を</sup>免<sup>まぬ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>其<sup>その</sup>首<sup>くび</sup>領<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>保<sup>たも</sup>つ<sup>つ</sup>檀<sup>たん</sup>越<sup>えつ</sup>の<sup>の</sup>  
 衣<sup>い</sup>は<sup>は</sup>寄<sup>よ</sup>附<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>財<sup>さい</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>暖<sup>ぬ</sup>衣<sup>い</sup>飽<sup>あ</sup>食<sup>じき</sup>は<sup>は</sup>佛<sup>ぶつ</sup>  
 家<sup>け</sup>小<sup>こ</sup>ハ<sup>ハ</sup>信<sup>しん</sup>綱<sup>かう</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>舌<sup>した</sup>蓄<sup>たく</sup>小<sup>こ</sup>隸<sup>れい</sup>一<sup>いつ</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>寺<sup>てら</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>  
 有<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>其<sup>その</sup>治<sup>ち</sup>訟<sup>じゆう</sup>を<sup>を</sup>聽<sup>き</sup>断<sup>だん</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>寺<sup>てら</sup>領<sup>りやう</sup>あり<sup>り</sup>て<sup>て</sup>祖<sup>そ</sup>



税<sup>し</sup>食<sup>じ</sup>と郡<sup>ぐん</sup>吏<sup>り</sup>村<sup>むら</sup>長<sup>ちやう</sup>の<sup>の</sup>寺<sup>じ</sup>領<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>治<sup>ち</sup>む<sup>む</sup>に<sup>に</sup>
 乃<sup>すなは</sup>類<sup>る</sup>一<sup>つ</sup>として<sup>して</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>治<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>仰<sup>おほ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>本<sup>ほん</sup>寺<sup>じ</sup>
 ありて<sup>て</sup>末<sup>ま</sup>寺<sup>じ</sup>統<sup>とう</sup>括<sup>くわく</sup>し<sup>し</sup>道<sup>だう</sup>心<sup>しん</sup>中<sup>ちゆう</sup>間<sup>かん</sup>を<sup>を</sup>使<sup>し</sup>令<sup>れい</sup>小<sup>せう</sup>使<sup>し</sup>
 一<sup>いつ</sup>騎<sup>き</sup>從<sup>じゆう</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>侍<sup>し</sup>小<sup>せう</sup>者<sup>しや</sup>あり<sup>り</sup>儀<sup>ぎ</sup>仗<sup>じやう</sup>小<sup>せう</sup>を<sup>を</sup>披<sup>ひ</sup>袈<sup>か</sup>裈<sup>こん</sup>
 を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>類<sup>る</sup>其<sup>その</sup>身<sup>み</sup>も<sup>も</sup>君<sup>きみ</sup>に<sup>に</sup>態<sup>たい</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>是<sup>こゝ</sup>皆<sup>みな</sup>
 異<sup>い</sup>端<sup>たん</sup>に<sup>に</sup>後<sup>ご</sup>こ<sup>こ</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>君<sup>きみ</sup>の<sup>の</sup>道<sup>だう</sup>統<sup>とう</sup>離<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>
 本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>故<sup>ゆゑ</sup>也<sup>なり</sup>父<sup>ちち</sup>子<sup>こ</sup>兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>に<sup>に</sup>間<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>肉<sup>にく</sup>縁<sup>えん</sup>に<sup>に</sup>返<sup>かへ</sup>り<sup>り</sup>
 とも<sup>とも</sup>死<sup>し</sup>する<sup>る</sup>時<sup>とき</sup>ハ<sup>ハ</sup>涕<sup>てい</sup>泣<sup>き</sup>を<sup>を</sup>垂<sup>た</sup>り<sup>り</sup>追<sup>お</sup>善<sup>ぜん</sup>回<sup>かい</sup>向<sup>かう</sup>とも<sup>とも</sup>
 する<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>骨<sup>こつ</sup>肉<sup>にく</sup>乃<sup>すなは</sup>親<sup>おん</sup>一<sup>いつ</sup>氣<sup>き</sup>の<sup>の</sup>血<sup>けつ</sup>脈<sup>みやく</sup>接<sup>けつ</sup>属<sup>じやく</sup>して<sup>して</sup>離<sup>り</sup>

づ<sup>づ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>頑<sup>こん</sup>然<sup>ぜん</sup>として<sup>して</sup>弃<sup>す</sup>て<sup>て</sup>以<sup>も</sup>事<sup>じ</sup>人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>
 小<sup>せう</sup>非<sup>ひ</sup>違<sup>い</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>形<sup>けい</sup>骸<sup>がい</sup>を<sup>を</sup>去<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>たる<sup>る</sup>も<sup>も</sup>又<sup>また</sup>
 子<sup>こ</sup>兄<sup>あに</sup>弟<sup>てい</sup>に<sup>に</sup>道<sup>だう</sup>を<sup>を</sup>離<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>本<sup>ほん</sup>心<sup>しん</sup>あり<sup>り</sup>故<sup>ゆゑ</sup>なり<sup>なり</sup>
 妻<sup>さい</sup>帯<sup>たい</sup>に<sup>に</sup>宗<sup>しゆん</sup>門<sup>もん</sup>を<sup>を</sup>阿<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>女<sup>にょ</sup>犯<sup>はん</sup>乃<sup>すなは</sup>傷<sup>やう</sup>を<sup>を</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>男<sup>なん</sup>女<sup>にょ</sup>に<sup>に</sup>室<sup>しつ</sup>
 居<sup>か</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>人<sup>にん</sup>に<sup>に</sup>大<sup>だい</sup>倫<sup>りん</sup>を<sup>を</sup>是<sup>こゝ</sup>と<sup>と</sup>捨<sup>すて</sup>て<sup>て</sup>以<sup>も</sup>事<sup>じ</sup>人<sup>にん</sup>
 人<sup>にん</sup>情<sup>じやう</sup>を<sup>を</sup>背<sup>そむ</sup>きた<sup>た</sup>る<sup>る</sup>乃<sup>すなは</sup>此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>僧<sup>そう</sup>徒<sup>た</sup>とい<sup>い</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>人<sup>にん</sup>
 こ<sup>こ</sup>生<sup>せい</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>男<sup>なん</sup>女<sup>にょ</sup>に<sup>に</sup>道<sup>だう</sup>を<sup>を</sup>離<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>故<sup>ゆゑ</sup>あり<sup>り</sup>師<sup>し</sup>
 弟<sup>てい</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>法<sup>ほふ</sup>侶<sup>り</sup>あり<sup>り</sup>檀<sup>だん</sup>越<sup>えつ</sup>あり<sup>り</sup>聖<sup>せい</sup>王<sup>おう</sup>の<sup>の</sup>俗<sup>じやく</sup>家<sup>か</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>
 て<sup>て</sup>相<sup>あひ</sup>往<sup>かう</sup>来<sup>らい</sup>する<sup>る</sup>を<sup>を</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>生<sup>せい</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>ハ<sup>ハ</sup>群<sup>ぐん</sup>を<sup>を</sup>樂<sup>たの</sup>む<sup>む</sup>



自然此情として禽獸の世情ならずり亦や然る非  
 まハ難<sup>ち</sup>深<sup>ん</sup>乃人として朋友此を離<sup>ち</sup>ま  
 得さる也かくれぬやの身ハ又倫<sup>れん</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>生  
 て本<sup>ほん</sup>石<sup>せき</sup>より河<sup>か</sup>に流<sup>り</sup>其<sup>き</sup>五<sup>ご</sup>戒<sup>かい</sup>に云<sup>い</sup>中<sup>ちゆう</sup>に飲<sup>かん</sup>酒<sup>しゆう</sup>乃<sup>の</sup>戒<sup>かい</sup>  
 ハあま<sup>あま</sup>と<sup>と</sup>酒<sup>しゆう</sup>を飲<sup>かん</sup>之<sup>を</sup>殺<sup>ころ</sup>生<sup>せい</sup>れ戒<sup>かい</sup>ハあま<sup>あま</sup>と<sup>と</sup>肉<sup>にく</sup>  
 食<sup>しょく</sup>の倍<sup>ばい</sup>もあ<sup>あ</sup>るを飲<sup>かん</sup>食<sup>しょく</sup>れ乃<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>の大<sup>だい</sup>欲<sup>よく</sup>なり也  
 君<sup>きん</sup>と士<sup>し</sup>との治<sup>ち</sup>を仰<sup>おほ</sup>む農<sup>のう</sup>の米<sup>まい</sup>穀<sup>こく</sup>と食<sup>しょく</sup>と工<sup>こう</sup>乃<sup>の</sup>器<sup>き</sup>  
 械<sup>かい</sup>を用<sup>もち</sup>ひ高<sup>たか</sup>れ通<sup>つう</sup>材<sup>さい</sup>小<sup>せう</sup>資<sup>し</sup>と今日<sup>こんにち</sup>れ用<sup>もち</sup>と辨<sup>べん</sup>する  
 ハ四<sup>し</sup>民<sup>にん</sup>之功<sup>こう</sup>と通<sup>つう</sup>せざる事<sup>こと</sup>と均<sup>ひら</sup>されハなりや

西夷<sup>せい</sup>れこ<sup>こ</sup>に君<sup>きん</sup>父<sup>ふ</sup>を輕<sup>かろ</sup>ん<sup>ん</sup>又<sup>また</sup>倫<sup>れん</sup>と盡<sup>じん</sup>く乱<sup>らん</sup>る  
 そのと<sup>と</sup>少<sup>せう</sup>も其<sup>き</sup>法<sup>ほう</sup>堂<sup>たう</sup>小<sup>せう</sup>任<sup>にん</sup>巨<sup>きよ</sup>海<sup>かい</sup>に航<sup>かう</sup>しる  
 法<sup>ほう</sup>を弘<sup>ひろ</sup>め得<sup>え</sup>る事<sup>こと</sup>を<sup>を</sup>其<sup>き</sup>國<sup>こく</sup>主<sup>しゆ</sup>の威<sup>い</sup>令<sup>れい</sup>と反<sup>はん</sup>ら  
 されハ<sup>ハ</sup>そのを<sup>を</sup>好<sup>この</sup>む事<sup>こと</sup>河<sup>か</sup>に流<sup>り</sup>父<sup>ふ</sup>乃<sup>の</sup>生<sup>せい</sup>育<sup>いく</sup>する  
 非<sup>ひ</sup>事<sup>こと</sup>ハ人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>別<sup>べつ</sup>れ<sup>る</sup>其他<sup>か</sup>の<sup>の</sup>も皆<sup>みな</sup>五<sup>ご</sup>倫<sup>れん</sup>れ<sup>る</sup>と  
 大<sup>だい</sup>抵<sup>たい</sup>前<sup>ぜん</sup>に論<sup>ろん</sup>せ<sup>る</sup>事<sup>こと</sup>は<sup>は</sup>是<sup>こゝ</sup>に  
 皆<sup>みな</sup>百<sup>ひやく</sup>の人<sup>にん</sup>倫<sup>れん</sup>と離<sup>ち</sup>る事<sup>こと</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>る</sup>其<sup>き</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>大<sup>だい</sup>道<sup>だう</sup>  
 乃<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>生<sup>せい</sup>と自<sup>みづか</sup>ら<sup>ら</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>る</sup>乃<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>道<sup>だう</sup>を<sup>を</sup>離<sup>ち</sup>れ<sup>る</sup>齊<sup>せい</sup>  
 民<sup>みん</sup>皆<sup>みな</sup>踏<sup>ふみ</sup>行<sup>かう</sup>ハ<sup>ハ</sup>小<sup>せう</sup>非<sup>ひ</sup>と異<sup>い</sup>端<sup>たん</sup>乃<sup>の</sup>徒<sup>と</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>ふ<sup>ふ</sup>







神明の詔勅字内小昭々たるを 神州乃第一  
 國小務まて尊とすも非ずや夫日月と光と改  
 めとて天も墜ちた地も傾き人民蕃息して  
 末光を作きなむ 今日四海も照臨すも  
 神明を儼然とす 太初也 天神也 天日嗣  
 と交授せ給ふ 至るハ歴然とす 天祖の  
 正胤ありて下に号令し給ふ 幕府を禍乱  
 と平け給ひ 東照宮に清束し  
 天朝の柱石なり 法部の君ハ天吏乃分職なり

神州の藩屏なり今これ臣民ハ 天祖  
 天孫仁澤を蒙りてその裔孫なり  
 幕府邦君乃政令を修ふもの也千萬世のる世  
 故を美變とすも君臣此大義父子乃至  
 恩小至るもてハ天地開闢せし初めより、また  
 至るもて一毫もかたがたありあらず 顯然とす  
 著しくして不備と離れ給ふも非れハ君  
 臣此大義父子の至親をかりて忠孝此も  
 孝一主婦の別也如此所朋友乃信を悞り



約ひく 神明の大訓は従ひ 幕府乃  
 号令を畏き 邦君は制法を守り 漸く異俗の  
 民もてを風化し 神聖の正しき道  
 小帰順せしめ 天日乃照しめん 邦りて人  
 倫乃五品は又典ある事を知り 邦りて所  
 とまひ方小と言ふ 所成約りて人乃道  
 及らめん 事 神明の大訓を垂き  
 邦ひ深き小をす 邦りて人乃道

奮武六

い 神聖は君民を撫育し 内りて  
 文教を捨り 邦りて武衛を奮ひ 邦りて文教の  
 邦りて 邦りて 中國の  
 民は久し 神聖は治を沐浴し 邦りて  
 邦りて 徳と仰ぎ 邦りて 四裔の戎狄を  
 邦りて 皇化小潤す 邦りて 擴釋を習俗  
 多かれ 邦りて 邊境を侵し 邦りて 邦りて  
 邦りて 神聖の 邦りて 懲らん 邦りて  
 邦りて 武衛を奮ひ 邦りて 征伐し 邦りて 邦りて



神代の初より武を貴と以てしつるを三  
 種乃神器も其一ハ天此叢雲の寶劍あり  
 天神天の壇子と 伊弉諾尊小振く國去と  
 岡部ひ素盞鳴尊十握劍と以て暴乱を誅し遂  
 小新羅すても渡り給ふ大己貴命廣牙を以  
 て法國を平け經津主武甕槌の神十握乃劍  
 と以て下土を定め 神武天皇靜靈の劍と  
 以て中あを平け給ひ日本武尊東夷を征伐  
 せられしを 太神宮の諸々叢雲乃神

劍を奉り遂に大切伐建られしを依りて  
 歷朝將帥を拜し給ふを節刀と授けし事  
 下々たる也其流風推し移りて武家も  
 鑿切勝丸小鳥此類乃刀劍を寶と以てし  
 武を貴ひしは其の法も中あを細戈千足  
 國と稱せし意少を叶へるなり其意も  
 皇化乃日に開きし事 神代小始也  
 神武天皇小玉りて不順の正統を征伐し大  
 業成基し給ひ 崇神天皇乃神時道成



四道けいぎ小也せうし四方を經營けいぎせしめ將軍と云皇子みこ  
 豊城命みよのとて東國を治め先づ北沛時み任  
 那な乃國朝貢ちやうくわんせし任那の地々今古三韓朝貢ちやうくわんせし朝鮮一屬と云  
 初め方々はつめ景行天皇けいぎやう北沛時み熊襲くまそ叛そむきされし  
 天皇親征あんなありし西海を悉く討平うちたいらば其後  
 再び叛そむきしとて又皇子日本武尊やましとて  
 古三韓こさん津我つがせし東夷志あづまを叛く人民を  
 鹵略ろりやくしけし日本武尊やまし又これをして伐うち東  
 方を平定たいせしなり沛代はいくは蝦夷あまを

征伐せいばつありし度島たけ北小逐おひ作しやう事こと  
度島ハ今ハ松前以北乃  
蝦夷地なり此ハ今ハ  
蝦夷奥羽の地  
小曼延ヤウ  
 人民乃患うまひ伐除つぎきし孫まご又又神功皇かみこう  
 后ご新羅しんらを征伐せいばつし國都こくときて改平かいへいけし此後  
 任那の地にんに宰府さいふを置おき法韓ほふかんを統治ちゆうりせし其  
今ハ長崎法基の如く物  
鮮の地ハ之らハ  
 比羅ひら文ぶんとて東夷を巡撫めぐらせし後方あき羊蹄やうていの  
 地ちに政所せいじよを立たて松前ハ今ハ蝦夷ハ西北邊ハシリハツ肅慎しゆしん  
之ハ地あり  
 征伐せいばつし是より肅慎しゆしん渤海ほくかい等ら北國きたくにに朝貢ちやうくわんせし  
肅慎渤海ハ後世東韃  
屬ハ今ハ滿洲北地ナリ  
 可かなりかく乃なりぬぬく天威てんい四



表ひび小被りこまりしりきとて天下乱るに及んで四夷の  
 朝貢も絶えてたり又外國より小侵寇せら  
 まるるも新羅蝦夷亦此寇害を邊民に侵掠せ  
 し此より其國を小國をれハ深害をハたり  
 均さるるしりきと  
 後一條天皇の御時少々女  
 真國の勢盛るる渤海の地を併せ有るる宋  
 國を奪んと志しり筑紫小来寇し壹岐對  
 馬と攻破り大宰府に攻迫つて賊徒管崎乃祢  
 宮伐禁んとせり俄小風浪起りて進退あり

かゝる島陰小船をよせ居ける其地を大宰府  
 少と船艦を修理して賊船と逐退りたり法言  
伊乃賊に稱する 此後女真國号を金と改め契丹伐  
 亡し宋れ半國と奪ひりれり 神ありハ  
 再ひ伺はさるるなりその後蒙古漢北より起り  
 て國を元と号し金伐滅し宋も亡さんこせ  
 し勢よ劣りて 龜山 後宇多兩朝乃同  
 小當りて 神州を劫さんて使と立てて  
 其辞無禮なるしハ 執權北条時宗立とあり



其使と劔收天下小令して戦備を備め兵を擧  
 て西戎を征伐せんと以蒙古果しく十萬の師  
 を起して来寇し西海の國に殆んと危かりけ  
 ば龜山上皇辱けおくも玉體を以て  
 國難小代り殆んと伊勢大神宮より祈禱し  
 殆ん歳程もたゞ暴風起りて賊船悉り  
 覆没せし是より後外寇殆んおさたを以て  
 後陽成天皇此時開白秀吉公朝鮮を伐破り  
 威を明國小震へりかくれぬ細戈乃解光外

國小輝かりそのも國体を辱めさるるも  
 神聖は君世々武衛を奮ひ殆ん一將烈た有  
 應りされども天地乃る小萬國ありて其國  
 の強弱を時の勢小よれ其の事ハ東照  
 宮此津遺訓は明戒を垂まひて後世乃  
 龜鑑たりて其詳形るこも世の知る事  
 是ハ是を漏しぬ其後熊澤了介も亦北狄を  
 論して昔蒙古漢土を奪んとせし時神州  
 小来寇を後世北狄より浮土を窺んとせし又



來寇すも事阿るべしとて是を憂とせり  
 西洋邪教此害を論し必財用の窮と人  
 乃惑と小棄して國家を誤る事阿るべし  
 一り西洋此邪教を本戎狄の陋習とせり  
 小兒を欺くも是らざる淺陋愚昧の妄説也  
 御も小伊斯把尔亞波爾杜尼爾佛郎察魯西亞  
 漢又利亞の國々も此儀尊奉し二百餘年前  
 より益々張大しありて法國を併吞し万里の  
 波濤を凌ぎ海外の西々に地東通商し其國

乃形勢を伺ひ弱きを以て兵伐舉ぐ是を襲ひ  
 強きを以て通商小を以て動靜を察し奇謀  
 巧計を以て民を耳目と悦ばめ幻術を以て其奇  
 怪を術ひ財利を以て其害に暗しめ邪教  
 を以て漸く小人の心を誘惑し遂に其の國を  
 奪し事氣なきこと以て教を以て此術を  
 以て西荒及び南海の諸島よりして海東の  
 諸國を以て盡く吞併し明國を以て伺んとし通  
 商し号し邪教を以て民心を傾んとせしむる



なまは 神あまもくも来り西海に國々小邪  
教を唱へ多く此愚民を欺き大名乃中おも大  
友小西印人の人々方ひも從ひ中國より織田  
殿もその部を移されりさきとて織田  
殿も亦その聰明能倫於きハ狡夷乃治ひく  
民心を悦めんこそとて見て其邪の河を幸  
と悟り多く邪徒を禁断せんとて七ヶ程を  
く下せとてれりさハ豊臣家興りく遂小邪  
徒を海に逐ひて 東照宮下下と

治め給ひくは益々嚴禁を設て邪法乃流を  
絶ち流まを塞ぎしめ 明正天皇此法時  
至りて肥前島原の邪徒蜂起けきと  
大猷公諸將を遣して征伐せしめ教乃此邪徒  
會聚し一城小籠りしを大軍以て圍  
之一時に誅戮ありしに邪徒天誅を遂るを  
の如く一網小亦盡されりさきとて  
天下に邪徒の種を絶ちしめ言ふ赫々たる  
神の威靈しき生民此大幸といふ



是亦依之國威海外之輝きも亦一も舉一も如く  
 日本人三眼あつてそく靈夷之舌を震ひ波海  
 一来る之れも長崎と見くも股慄きし細文  
 千足乃傳光は非とやかく此れ如く武衛を奮ひ  
 四夷は獷悍なる風俗とも變へ  
 皇化は綱  
 神聖は深意をまじり  
 すまはるる祈年月次等の祭に 天照皇  
 大神と祝する詞也 皇神の見齋一も  
 四方は國と天の壁立極國の退立限り青雲の

霜極白雪は墜坐向伏限り青海原を棹枚不平  
 舟艦の至り為らん熱大海小舟満つけく陸  
 不往く道は荷結傳堅く磐根本根履さくして  
 馬は爪の至り留らん限りもそりの間外く立  
 陸は如く徳國は廣く峻國を平け遠國を八十  
 綱亦掛く一寄らる事此もや  
 皇太御  
 神乃寄奉る荷前も 皇太御神乃大前も横  
 此れ如く亦積置て残を平けく少くも  
 皇化は廣く及ひく四表は國も



てと被<sup>つ</sup>ん事々々 天照太神の神意少<sup>も</sup>も愜<sup>ぢ</sup>こ  
 せまふ事々々々 神あれ臣民たらんもの  
 今日 歴朝の皇化一<sup>は</sup>治一<sup>り</sup> 東照宮の地澤  
 衣<sup>つ</sup>被<sup>つ</sup>り戎狄犬羊此<sup>は</sup>統小汗ささく事々々と免<sup>は</sup>る  
 皇大神の末光と仰さく世小を分り 神意  
 乃<sup>は</sup>弟分此一<sup>は</sup>の知くく武衛と奮ひ 皇化を  
 廣くせんと思ふんをなく蟲魚と同く世成さるん  
 事<sup>は</sup>神罰も畏るへる又已りん少も恥さらんや  
 されハ貴賤智愚賢不肖と形く此祝詞を形<sup>は</sup>る

口小涌一<sup>は</sup>心よ念ひく暫くも忘さる 神明  
 乃<sup>は</sup>六合よ照臨あすて群生成<sup>は</sup>覆育一<sup>は</sup>終ふ  
 仁徳を廣く一<sup>は</sup>鴻恩此<sup>は</sup>弟一小報ひなると志  
 せんきさるり

常陸 會澤安述











